

蹴上付近地図

伏見にはインクラインが設置された。

### 3. 琵琶湖疏水のルート

はじめに掘られた大津市から京都市東山区蹴上までの水路は「第一疏水」、次いで掘られた先の水路にほぼ沿う全線暗渠のものは「第二疏水」で、蹴上船溜りのところで合流し、蹴上浄水場、蹴上発電所（落差34m、最大出力4500kW、最大使用水量16.7トン／秒、電力土木技術協会水力発電所データベースから）に分水される。

発電された水は南禅寺船溜りから鴨川まで、鴨東運河（おうとう）として流れる。また、蹴上船溜りと南禅寺船溜りの間には船をケーブルカーのように引っ張

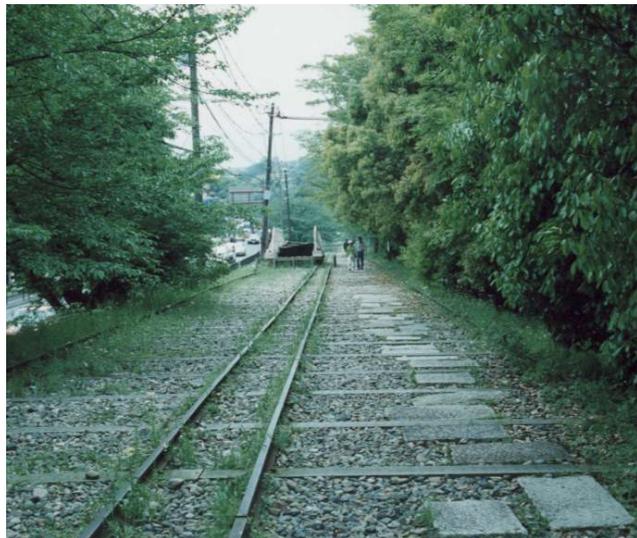
り上げたりおろしたりする目的でインクラインが設置された。延長は532m、勾配は1／15で、船はレールを走る台車に載せられて上げ下げされた。疏水は人と貨物を運び、貨物では大津からの下りは米・砂利・薪炭・木材・煉瓦など、伏見からの上りは薪炭など。しかし鉄道を主として競合陸運の発展により衰退し、大津行き上り貨物は1936年以降なくなり、大津からの下りは第2次世界大戦中も運航されたが、1948年に蹴上インクラインの運転が停止された。

旅客輸送時間は大津－蹴上の下りが1時間22分、上りが2時間20分であったが、京阪電鉄の開業延伸により大正には廃業となっている。

鴨東運河は鍵型に北に一度曲がってから、鴨川運河



写真一 大津の第1疏水トンネル入り口  
桜の名所に



写真三 インクライン跡  
広い複線の軌道レールが保存

にぶつかる。北に少し振ったのは、高低差をすこしでもかせごうというものでなかっただろうか。鴨東運河は夷川ダム（えびす）で3.4mの小落差発電（最大出力300kW，最大水量13.9t／秒）をしていて、こんな昔によくやったもの。ここは以前は閘門だったような感じである。その後、鴨川に沿って流れる鴨川運河で伏見発電所（墨染発電所，有効落差14.3m）を経て伏見掘詰の濠川から宇治川にそそぐ。

一方、蹴上で分水された水は「疏水分線」として水路閣のある南禅寺境内を横切り、扇ダムで一部分水し、哲学の道に沿って北に流れ、高野川・賀茂川を横切って堀川に至る。水路閣はローマの水道橋のようにアーチ構造でレンガが使われていて、いまや風格があり、その横から上に登って分水の流れを見ることができる。この水の量はこれまでの疏水に比べずっと少ない。

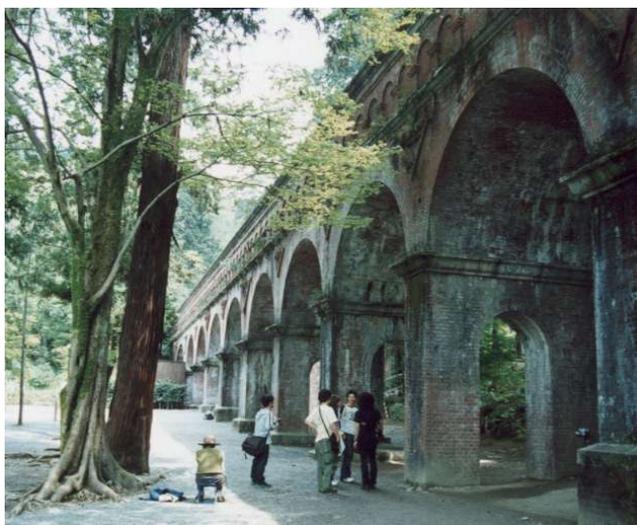


写真-4 水路閣

#### 4. 琵琶湖疏水の散策

運河として利用するため開水路として計画された第一疏水は三井寺近くから発する第1トンネルに入る。湖からトンネルまでは土地を切り開いてつくった開水路で、いまや桜の名所になっている。長い第1トンネルは、山科の北の比叡の山裾に顔を出し、山の斜面中腹に沿って走り、蹴上の船溜まで流れている。水量は毎秒8tであるので日量にすると70万tにもなる。延長は8.7km。第2疏水はほぼ同じルートであるが全線トンネルとなっていて近寄れない。第一疏水は船が通行する運河として設計されたため、トンネル部を除き両側に並木のある測道のついた水路となっていて、平坦な散歩道として、春は桜、秋には紅葉を楽しめ、ありがたい。



写真-5 水路閣の上の流れ

一度写真撮りに、山科駅から北に少し歩いて疏水に行き着き、そこから南禅寺の方まで歩いてみた。水路の両脇には歩道があり、トンネルもなんとか脇道があつて通れた。疏水はけっこう高いところを流れていて、土手の上を走っている東海道線がはるか下に見える。

問題は最後のトンネルであった。坂を降りて南に少し回り道して道路を歩いて行けばなんていうことはなかったのに、北の山に入る道を選んでしまった。標識に沿って歩いていったら、いつのまにかきつい山道になって山奥に入り込んでしまい、途中でハイキングの人に道を教えてもらって、やっと南禅寺のところにとどり着くことができた。どうも背広、革靴で歩くところではなかったようである。

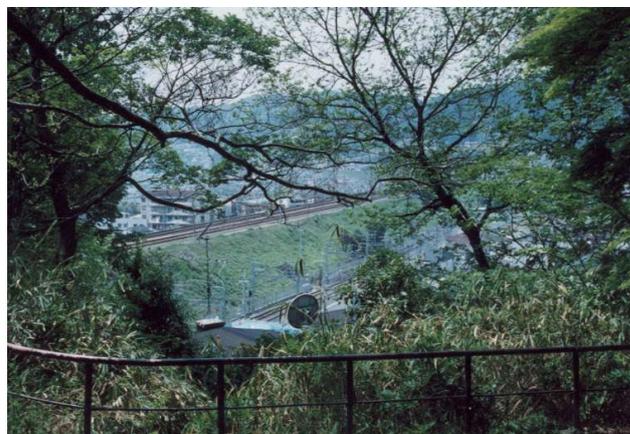


写真-6 東海道線を見下ろす  
疏水の側道から

#### 5. 東山の庭園群

蹴上、扇ダムなどからは小口の水供給もなされていて、東本願寺、平安神宮、京都御所、円山公園などの公共的存在の庭園のほかに、東山別荘群の様々な日本庭園にも行っている。

小学校の頃、寝殿造りの絵が教科書に載っているのを見て、一度は家の中に川が流れ込んでいる家に住みたいと考えた。だれもそういう感覚は持っていると思う。

日曜に放映されるテレビのダッシュ村で、昔の農家の再現を放映しており、小川が敷地内を流れ、池を掘ったり、水車を回したり非常に楽しい企画をしていて、ありがたい。自分もお金があったらこういうことをしたいと考えているが、実際にはこういう土地の世話は大変な作業を必要とし、テレビで見ているだけの方がいいのかもしれない。

東山別荘群の地域はかつて南禅寺の広い所有地であったが明治政府によって接収されてしまった。当初は琵琶湖疏水もあり、工業用地として考えられていたが、結局15の別荘群が開発された。これらの名庭園は明治末期から昭和初期にかけて、時の権力者や豪商の邸とともにつくられた。これらは作庭家・小川治兵衛によるもので、その頃利用可能となった琵琶湖疏水が引かれている。このうち無鄰菴（アメリカの日本庭園専門誌でランキング第4位、1位は足立美術館庭園）、永観堂は見学ができる。しかし、碧雲荘、何有荘、有芳園、對龍山荘、織宝園などは企業などの所有などで公開されていない。

庭園の水コストについて京都市上下水道局に教えていただいたところ、庭園などの約20件の小規模な供給があって、目的は防火用とされ、毎秒1リットルの供給で料金は月8715円とのことであった。庭園の池であれば塩素がない原水の方がいいし、基本的に流れるだけで下流の水利用には影響しないのでこういうケースを増やしてもいいように思えるが、水利権の課題があるようである。また排水が下水道に入る場合は使用料の対象になるが、南禅寺の周辺は分流式下水道であり、合流式であっても水路が整っていてそちらに流れるようである。



写真-7 無鄰菴の流れ1

上流、滝を出て浅い幅広のせせらぎで流れているところ。すぐ先が池で、その向こうが主屋の2階

## 6. 無鄰菴

別荘群のなかで最初につくられた無鄰菴は、明治27年から3年かけて明治・大正の元老である山県有朋（やまがた ありとも）が京都に造営した別荘で、その名は、有朋が長州（山口県）に建てた草庵が隣家のない閑静な場所であったことから名付けられたといわれる。その後、有朋は京都の木屋町二条に別荘を構え、無鄰菴と号したが、さらに新しい地に好みの別荘を作りたいと考え、現在の地で無鄰菴の造営にとりかかり、明治29年に完成した。

日本古来の「山水回遊式庭園」の形式をあえて採らず、作風の主題を「自然」、とりわけ「水流」に求めたとされる。庭園の奥の滝からの流れは、浅く広く流れた後、中央の池に入りそこから主屋左から回り込むせせらぎとなり、主屋右手の茶室の方からくるせせらぎと、主屋の前で合流し、流れていく。主屋から見えるのは東山を借景とし、後背の木々と合流するせせらぎだけである。

主屋前の主庭には芝を広く植えられ、植え込みも低く、明るい感じがするのも特徴である。ただ主屋の2階からの眺望は、池と植え込みと東山という構図になるので、この標準的ないい眺めも意図していたのだろう。

明治31年に建立された洋館もあり、ここで明治36年4月に、元老・山県有朋、政友会総裁・伊藤博文、総理大臣・桂太郎、外務大臣・小村寿太郎の4人によって、日露開戦直前のわが国外交方針を決める「無鄰菴会議」が開かれている。

有朋の残した庭園はほかに本宅であった「椿山荘」と「古稀庵」がある。古稀庵（こきあん）は、明治40



写真-8 無鄰菴の流れ2

主屋の前。池からの左からの流れと茶室からの右の流れが合流